

古本屋の戦後

生きていて

よかった

金森 正雄

く迄の五年間、生きていたのが不思議なくらい何度死線を越えてきたことか。

召集されるとすぐ幹部候補生に志願するよう要求された。これを断って東満洲のソ連国境地帯の警備隊に送られた。幹候志願の連中は南方行きで海中に散華したと聞いた。

昭和三年(一九四八)五月二八日、緑の山々に取り囲まれた舞鶴港に入ってきた復員船山澄丸、一千名のシベリヤ抑留復員者の一員として私は帰ってきた。「本当に帰ってきたのだ！生きていてよかった！」の思いとともに「さて実家は、親兄弟は、何処へ帰ったらよいのか」と頭がぐるぐると回り出した。上陸するとすぐ郷里の現況揭示所へ走った。名古屋街現況地図には、案の定私のいた中央部の栄地区は真っ黒に塗り潰されている。「矢張りそうだったのか。私の帰る所は何処か」一通だけ無料で発信できる電報を、父の生家の岐阜県郡上郡の伯父宛に打った。

想えば、この舞鶴港へ帰りつ

出されて満洲に疎開してきた一団が「ここは天国だ」と話していたが、その一カ月後どうなったか今でも気にかかる。八月九日ソ連侵攻。経理学校の教育隊は直ちに原隊に復帰となったが、私の原隊は玉砕で帰れない。

召集されるとすぐ幹部候補生に志願するよう要求された。これを断って東満洲のソ連国境地帯の警備隊に送られた。幹候志願の連中は南方行きで海中に散華したと聞いた。

シベリヤの收容所での最初の冬は、厳冬と空腹に重労働で犠

牲者が続出した。なにしろ三八度以上の熱が出ないと休ませてくれないので辛い日々だった。私も遂にカゼがこじれて発熱し休業になったが薬も無く、隣に寝ている戦友は高熱から脳症を起こしうわ言をいつているがどうしようもない。ところが急に

この收容所が上級機関から検査が実施されることとなり、病人はいないことになっているので、寝ている病人を急拠病院に送り込むこととなった。八人の患者は厳冬のなかを馬そりとトラックを乗り継いで、一日掛かりで病院に着いたときには、四人は死体置き場へ二人は翌日死亡。その内の一人は先に国へ帰ったら安否を留守宅へ知らせようと、互いに住所を暗記しあつた仲だったが、私ともう一人だけが生き残ったのだ。病院といつても一つの寝台に二人頭足交互に寝て、朝起きたら隣の人が死んでいたと言うような状態で生きていたのが不思議なくらいだった。

田舎の伯父に打った電報に「ミナブジ、ナゴヤへカエレ」と返信がきた。五月三十一日帰還手当七百元を握りしめ、郷里に向かった。途中京都駅で学生援護会で引揚者のお世話をしている妹が出迎えてくれて店の回りの一角が焼け残って家族全員無事である事を聞いた。深夜の名古屋駅には三十名程の人が私を迎えてくれた。

私の店とそれに続く住宅は名古屋の中心部で、斜め向かいの松坂屋を始め周囲は爆弾と焼夷弾で焼け野原となり、わが家にも焼夷弾が屋根を貫いて部屋で破裂したのを消し止めたとかで、焼け痕も生々しく残っていた。父は当時町内会長として責任上踏み止まって三十戸ばかりのこの一画を残したと聞いた。兄弟姉妹十一人の総領として、必死に家業を残してくれた父母兄弟に対してもこの維持向上に奮迅しなければならぬとひしひしと感じた。街を見て歩くと、栄町から鶴舞公園迄に二十数軒あった書店で同じ場所に残っているのは、松本書店、二昌堂、東文堂、其弘堂、飯島書店、日進堂だけで、栄町角の栄小路には、竹内書店、飛切堂、尾関書店、世界堂が、丸武マーケットには服部書店が、鶴舞公園前には

山星書店、鶴舞書店が出店し、竹中書店、三松堂、大学堂は旧店舗の近くに開店していた。デパートの松坂屋、丸栄にも古書部が出店していた。チェーン店を作った古書売買を大々的に展開している店もあった。

焼けのこった店舗も新規開店した店も、これを維持して行くには、戦後名古屋市の施行した都市計画との闘いであった。東西、南北に走る百米道路を始め、道路拡張、マーケットの撤廃などで折角開店した店も次々に追いやられて行くような状態になっていた。

昭和二十三年には、それまで愛知県一円を地域としていた愛知県古書籍商業協同組合は、名古屋、一宮、東三河、西三河の四地区に分立して単一組合を作った。その頃名古屋の市会各支部毎に開設され、瑞穂、西、中、千種の各支部がそれぞれその地域でお寺などを借りて市会をひらいていたが、地域が分散され又地域差もあつて組合会館の設立が要望されていた。二十五年頃町内の方から松坂屋東の八十坪の土地を三十万円で買ってほしいとの話があり、とりあえず

買い取って組合に提供した。さて資金はもとより都市計画による規制により、容易に家屋を建てる事ができない。その内当時のインフレで半年もたたぬ内に土地価格が倍増し、これ売って家つきの土地を買いおつて来たような有様だった。ここが現在の組合会館の発祥の地である。その後十年間に亘る紆余曲折の末、四十一年に会館は鉄骨スレート葺に建て替えられ、尚今年の組合総会で二階建てに改築することが決議された。

二十三年八月名古屋に於いて全国古書籍商組合連合会の創立総会が開催され「全連」が発足し、二十五年十月「全連」発足の地として第一回全連大会が名古屋市の建中寺に於いて開催され、その後十年毎に名古屋で全連大会が開催されるような慣例になったようだ。その頃名古屋市内の古書店は二百軒あまりで、他に貸本業者があつた。二十五年頃の古書組合員は百七十名で、時勢とともに古書店は暫減し、更に組合会館建設の負担金などで淘汰され約八十名位になったが、若手の台頭によって現在百名を越し次々と新人の入会

が続いている。

この間スーパーやデパートの古書展が盛んになり、デパートでは名鉄、三越、松坂屋、丸栄で始まったが、現在では丸栄、西武春日井店、名鉄神宮前店で毎年一回開催している。その外組合の古書会館で有志書店により年十回開催されその都度古書目録を発行している。

古書組合創立当時の市会支部ごとに開催されていたが、その後会員が減ったりして、支部市の伝統を保ちながら活気ある有志を加えた五月会、典友会、研究会、中市会、千草会の五つの市会になり、毎週火曜日を市日として凡て入札でそれぞれ特色のある市会を開催している。

三十四年(一九五九)の伊勢湾台風では店の屋根が吹き飛ばされたが、そのおかげで倒壊を免れた。戦争中父が必死で空襲から守ってくれた店は焼け残ったため、都市計画による道路拡張幅にかり建て直さねばならなくなった。町並みの店舗の一斉ビル化は至難の事業だったが、東京オリピックの翌年父が喜寿、開店五十周年、金婚式の年、ビルは完成し、それを期に一階

を新刊部に、二階を古書部にした。父が兵役が終わって岐阜県から名古屋へ出てきて、最初に勤めた一二三館書店は、名古屋空襲の際主人が爆弾で死亡し絶えていたのを、次弟がその名跡を継ぎ復活した。これで父は隠退し四十九年(一九七四)十二月八十五歳で昇天した。母は九十二歳迄長命した。私を頭に十一人の兄弟姉妹は現在まで全員健在で、揃って長命しギネスブックに載ろうと思っている。戦前からの店は十指にも足らぬ現状で、戦後の店でも二世店主が増えて来ている。

宣教師が国へ帰るといふので原書を一山買い込んだが、倉庫へ入れておいたところ、折からの大学新設ブームで、設立審査のため図書館に並べる本を貸してくれと頼まれて二回程貸したが、三回目の大学では認可が遅れるので、支払いも遅れるというので手古づつた事がある。

組合へ名古屋教育センターから、高校教員研修会に講師を派遣されたいと要請があり、太田理事長が私に行ってくれと頼むので、漫談でよければと先方に照会したら、それでよいと言う

ので、「古書漫話」と題して二時間話をしたら、面白がって三十分延長した。研修会で時間延長したのは始めてだと言われたが、研修要録には物々しく発表された。

デパートの古書展では、広報部から新聞、テレビ等にニュースとして取り上げたいのでネタがないかといわれネタ造りに苦労する。写真入りで記事が出て(○歳)とでるのが気に要らない。六〇台ならまだしも七〇台に入ってはどうもいけない。現役としては組合で最年長で監査役を務めている。

今年シベリヤ抑留の戦友会で終戦の年に入隊した最後の初年兵が七十歳になったので私のと合わせて喜寿、古希の祝賀会を開いて「生きていてよかった」を満喫した。(文中敬称略)

(名古屋 東文堂書店主)

取扱品目

引札 ポスター ちらし 一枚
もの 地図 札 券類 高札 看板
板 被 版 木 容 器 類 軍 隊 も
の 法 被 の れ ん 布 製 品 等
戦 後 の も の は 扱 い ま せ ん

月刊目録発行中

〒531 大阪市北区大淀南

森里商店
三丁目十番十六号